

## 『立身膝栗毛』の構造

——小説表現としての「旅」と「恋愛」——

武田 悠 希

はじめに

日清戦争から日露戦争にかけての時期は、近代化の過程で整備されていく教育制度に伴って、若者の生活に大きな変化がもたらされた時期でもあった。明治三十三年に商業作家となった押川春浪の作家活動をより多面的に捉えていくためにも、その背景となる同時代状況を、日本帝国主義の発展期として見るだけでなく、教育制度の整備に伴う青年の生活状況をめぐる社会的変化に注目して眺める必要がある。

押川春浪の作品を含めて、明治期の冒険小説が出版文化の一つのジャンルとして興隆していく背景は、明治期日本の侵略主義や「海事思想」の昂揚に応じるものとして説明されることが多い。

たとえば、高橋修<sup>①</sup>は、「日清戦中・戦後」に「少年向けの〈海洋冒険小説〉というジャンルが編成され」た背景として、「帝国主義列強の中に自ら進んで入り込んでいくための拠り所・根拠としての同一性」が表れた「概念」である。「海国」というイデオロギー<sup>②</sup>が関わっていると論じ、押川春浪の初刊行作品『海軍海底軍艦』(文武堂、明治三十三年一月)についても、「海事思想」との結びつきを指摘している。

拙論「押川春浪『海軍塔中の怪』における娯楽への意識——「海底軍艦」を相対化する物語として——」(『論究日本文学』第九七号、立命館大学日本文学会、平成二十四年一月)においても、押川春浪の初期の冒険小説『塔

中の怪』を取り上げ、「海事思想」を背景として、「冒険への好奇心」が、国家の盛衰に関わる青年の「元氣」や「品性」に適した「娯楽」として描かれていることを指摘した。その際、『塔中の怪』に描かれた「冒険への好奇心」は、当時青少年の墮落と結びつけて論じられた「恋愛小説」と対峙する要素となっていることを論じた。

恋愛小説に背を向ける姿勢で執筆された『塔中の怪』に対して、本稿で取り上げる押川春浪『立身膝栗毛』(世界奇抜譚第三編、大学館、明治三十七年一月)は、主人公の少年の精神の揺れ動きに焦点を当て、「旅」や「冒険」への欲求と同時に、恋愛や性に関する欲求を取り上げた作品である。

少年時代に押川春浪の作品を愛読した江戸川乱歩は、早稲田大学在学中に自製した冊子『奇譚』<sup>③</sup>のなかで、『立身膝栗毛』について、「少年の憧れ易い恋心とその病的な発作を主題とし」、「少年の僕の romantic な性格が是に共鳴する所が多かった」、「二度読んだ程 attractive に感じた」と記している。なお、乱歩は本作について「翻訳である」と記しているが、原著については記載がなく、特定していないようである。

本稿では、少年であった江戸川乱歩が読者として「共鳴」したとする『立身膝栗毛』を取り上げ、同時代の青年の生活状況の変化という視点から、作品内容の把握を試みる。

以下、まずは本作が同時代の青年の境遇を物語化した作品であることとを把握し、そのうえで、本作における少年の経歴談の構成に注目しながら、

ら、小説のなかの「旅」・「冒険」・恋愛の描写にどのような意味が与えられていたのかを分析する。押川春浪が同時代の青年の境遇をどのように物語化したのか、この作品が何を試みたものであったのか、その可能性を探っていきたい。

## 一 浪雄少年の人物像

『立身膝栗毛』は、「オーストリア 奥太利国の首府ウキンナ」(五頁)の中学校に進んだ少年が、家庭や学校生活で、様々な精神の揺れ動きや出来事を経験する過程を、少年が大人になり「成功」した時点から回想して読者に語り聞かせる形式で書かれた小説である。

元来私が此小説を著す目的は(略)案内地図同様、あるひは諸君の御参考にある事もあらうかと存じ(略)既に運命の駒に跨つて世界に乗出せし諸君、いざや之れより首途に上らんとする諸君、何うか私の経歴に眼をとゞめ、私の踏迷ふた道をば避けて通り、少しでも私が成功の道を切開いて進んだ跡があつたなら、只管その道に向つて、駒の足騒あがきを速められん事を望むのです。(三〜四頁)<sup>③</sup>

「世間からは大政治家の一人に数へられ、富あり名誉ある地位を得ました」という語り手の千鳥浪雄は、作品の冒頭で右のようにその目的を述べる。人生の半数を終えて「成功」した者として、読者に「案内地図」として、自分の経歴を語ろうというわけである。

タイトルに「立身」と付け、冒頭に成功者の経歴談であることを表明する『立身膝栗毛』の枠組みは、同時代の立身出世への関心の高まりや、関連出版物の流行を背景としている。

『西国立志編』と『学問のすすめ』をきっかけとして広く明治期の日本に広まっていた立身出世主義<sup>④</sup>は、地方青年たちにも伝播して、「成功」という言葉の流行に接続していく。明治三〇年頃には、そうした立身出世熱を背景として、成功や処世のために地方から上京する学生、苦学生などの存在が注目を集めるようになっていた。<sup>⑤</sup>竹内洋は、地方青年の苦学や独学ブームの背景として、明治三〇年頃における男児の就学率の増加と高等小学校の入学者・卒業者の増加という「学校化」の現象を指摘している。

苦学や独学による立身出世の欲望が高まりつつあるなかで、そうした状況や苦学熱に対応した雑誌として、明治三五年一〇月に、「立志成功の益友を以て任ずる空前の自助雑誌」と謳った「成功」(成功雜誌社)が創刊される。これには、成功者の経歴談や「立志小説」などが毎号多数掲載された。

明治三六年一月の「新声」に掲載された藤井佛川「自然主義」<sup>⑦</sup>には、「近頃、青年の間に、実益とか成功とか云ふことの多く歓迎せらるゝと聞く」、「徒らに大なる成功を望んで苦心焦慮するを休めよ」とあり、『立身膝栗毛』が刊行された時点での、「立身出世」、「成功」への関心の高まりが窺える。

『立身膝栗毛』は、ヨーロッパを舞台とし、翻訳小説の可能性も拭いきれない作品でありながら、主人公である浪雄少年の人物像には、明治三〇年代における日本の青年をめぐる言説と、青年の境遇への関心が確かに反映されている。

「奥太利」に住む貴族の少年、千鳥浪雄の一〇歳から一三歳までの経歴談である本作では、当時の学生の風紀問題として取り上げられた話題を重ねて、「ウキンナ府」の中学校での浪雄少年の生活風景が描かれる。

「ウキンナ中学校」に入ってから約一年後、「餓鬼大将」(八九頁)となっ

た主人公の浪雄には、「その勢力を得ると共に、或る一つの欲望が起」こり、一つ下の年齢の同窓の友、梅村薫という少年と「親友——義兄弟の契を結ばんと」する。梅村薫は「色白く髪黒く、眼は常に露を含めるに似て、唇は紅の花の如く、実に美人伝の口絵にでもありさうな」、「校内では大評判」の美少年で、浪雄は「初めて此学校に入つた時から、薫少年に眼を着け」、「何うにかして彼と無二の親友にならうと企て」る。浪雄が「彼に交際を求めるのは、彼を有益な友と思つた為ではなく、いと恐るべき情慾の燃えた為」と記される（九二―三頁）。

学生間の男色は、当時の新聞雑誌において、学生の風紀問題の一つとして度々取り上げられた話題である。たとえば、明治三四年四月から五月にかけて二十三回にわたって連載された「学生の堕落」という記事では、その八―九回で「美少年の事」として取り上げている。この「美少年」をめぐる挿話の他にも、『立身膝栗毛』で語られる浪雄少年の経歴には、「演劇」や「小説」に熱中し、様々な「美人」の誘惑に迷うなど、当時の学生について取り上げられた事項が重ねられている。

浪雄はまた、「立身出世」の価値観のなかで、学歴取得の道を歩みつつある少年として設定されている。浪雄の父は、「男の児は十二にもなれば、之れから世間へ出る準備をせねばならぬ」と言い、「大学に入るにも都合が良い」中学校に入る道を進ませる。浪雄も「人生の榮達と云ふ事に意を馳せ」に思いをはせ、中学校の寄宿舎に入る（八五―六頁）。

竹内洋<sup>⑤</sup>が紹介するように、東都遊学者の「堕落」は、明治三〇年以前からすでにメディアの多く取り上げるところとなっていた。

『立身膝栗毛』の浪雄少年に重ねられた学生像は、立身出世のために上京してきた青年、あるいは、中学校から帝国大学へという学歴による立身出世を目指す青年でもあった。

このように、浪雄少年には、当時の堕落学生や学校教育による「立身

出世」を目指す学生像が反映されている。同時に、彼は日常生活から「飛び出して見たい様な心地」（五九頁）を抱える人物として描かれており、作中では、亡き母の故郷である「ウエニス」へ旅立ちたいという欲求が繰り返し描かれる。こうした浪雄少年の人物像にはどのような意味を見出すことができるだろうか。

押川春浪は、東京専門学校在学中に、「学生に冷淡なる社会と無法なる教育者とに与ふ」と副題を付した論説文「日本書生の悪因縁」を、雑誌「海国少年」第四年四号（東光社、明治三三年四月五日）に「押川残月生」の名で投稿し、学生の立場から、メディアで取り上げられる学生の堕落について論じている。

この文章で春浪は、青年を「羊」、教育者を「羊を追ふ牧者」、青年を取り巻く社会を「際涯無き平野」にたとえて、学生の「不幸」を論じている。日々の「過重な」学業を修める学生の「困苦」、「倦怠」、「疲労」、「呻吟」を説き、それを無視して、ただ「叱咤」するだけの教育者や、青年を誘惑する娯楽しかない社会に罪はないのかと主張している。論説の末部では「学生の如きは只々苦痛を忍んで可なり、即ち君子の如く行ひ因徒の如く苦役す可きのみと為さば吾輩最早言ふ所なし」とし、「只だ期の如き殘刻なる社会に生れ這般無情なる教育者の指導を被る事（略）前世の悪因縁と諦悟するの外なかるべし」と結んでいる。

この文章に類出する学生の「困苦」という語は、立身出世主義の禁欲的な徳目を説く『西国立志編』において、成功するための「良師友」であり、「許多ノ事ヲ成」すためには、「耐へ」、「避逃ルベカラサルモノ」として説明される<sup>⑥</sup>。

押川春浪が「日本書生の悪因縁」のなかで繰り返すのは、「学生」や「青年」につきつけられる、この立身出世主義の教義に対する違和感の表明である。将来のために「過重な」学業という「困苦」を抱える学生に

とって、この立身出世主義の教義によって叱咤する教育者は、ただ羊を追いつけるだけの「牧者」でしかなく、「困苦」から墮落に陥る学生を救うにあたって、解決策を与えるものではないと、東京専門学校在学中の押川春浪は述べている。

高等教育を受けた継母による厳格な家庭教育<sup>⑩</sup>、大学卒業者の家庭教師による授業、立身出世のための中学校進学のみならず、ことあるごとにそこから「飛び出し」たくなる衝動を抱える浪雄少年は、教育制度を中心とした立身出世主義に組み込まれていくなかで苦悩する同時代の青年の境遇を体現した存在として読み取ることができよう。

したがって、『立身藤栗毛』は、少年の立身出世の経歴という形式を採用しながら、同時代の立身・処世関係の文献とは異なる方向性を示すことになる。

作中で度々示される大人たちの意見や世話は、主人公の浪雄にとっては一時的な効果でしかもたらさないものであり、肝心の教訓は浪雄の心理的成長に対してほとんど影響がないかのように描かれる。

野田叱電『<sup>成功</sup>青年立身訓』（実業之日本社、明治三六年一月）の場合であれば、父親から受けた教訓によって、主人公は反省し、己の行動を改め、そのことによって成功するのであるが、浪雄の場合は、父の「意見」や「世話」によって、問題が解決されることはない。

小説の結末部分で、浪雄少年が、自分の前途に「希望の光」を見出すきっかけとなるのは、立身出世や処世のための教訓を与えてくれる大人たちではなく、「諸国を遍歴」する「旅画師」の姿である。

## 二 小説構造における「旅」と「冒険」

旅画師との再開によって、主人公が自分の「前途」に「希望の光」を

見出す結末は、物語全体をどのようなものとして読み手に呈示しているのだろうか。

まずは、旅画師の何が、少年に「希望の光」を感じさせたのか、結末で少年が見出した「希望の光」とは何かを確認するために、旅画師の父である樵夫の言動と旅画師の言動とを比較する。

「ウエニス」を指した旅の途中で、山賊に所持金と衣服を奪われ、「シヤツ一枚」の姿で山の中で行き倒れとなった浪雄少年は、「一人の年若い樵夫」（一七五頁）に助けられる。浪雄少年が正直に経緯を説明し、「伊太利ウエニスへ行かんとて、都府の学校を出発した事から、昨夜この山中の何処かで、悪者のために旅費を奪われ、あまつさへ上衣まで剥がれた」と「落も無く語」ったところ、老人は「哀憐を催し」た様子で次のように「意見」をする。

『それと云ふのもお前様が年若き身で、未だ了見も定まらぬのに、父御や学校の教師の意に背き、無法の冒険を企てた天罰です、これに懲りて以後お慎みなさるが宜い』と、懇々意見を加えました。（一七六頁）

樵夫は少年の旅を、父や学校教育の意に背く「無法の冒険」として批判し、「天罰」という言葉によって、自己責任として反省し、今後行動を改めるよう促している。その後も、少年が山賊に復讐したいと言うとお前様が酷い目に逢つたのは天罰だから」といつて押しとどめ、「今の世の中は恐ろしい」、「人間は威張つて決して得の行かぬと云ふ事」と教訓を浪雄に与える（一七七―一八〇頁）。

このように樵夫は、浪雄が「酷い目」にあったことに同情しながら、浪雄の旅を否定する。それを浪雄の方は、「一々道理とは思ひますが、そ

れにしても」や「斯く云はれて詮方なく」（二七七頁）というように、消極的に受け止める様子が描かれる。

一方、浪雄が一番影響を受ける旅画師の意見はどのようなものであるうか。浪雄と旅画師は、作中で二度出会う構成となっている。一度目は、中学校から数町ほど離れた丘で出会う。旅画師が、浪雄少年が長年憧れ続けている亡き母の墓がある「ウエニス」を訪れ、絵に描いたことを聞いて驚き、「ウエニスの土地を踏んだ時、どう様な心地が致しました、私なら其場で死んでも構はぬと思ひますが」と少年が問うと、旅画師は「呵々と笑ひ」、「ウエニスぢやとて（略）此処から左迄で遠からぬ土地、行かうと思へば何時でも行けるでは無いか」と答える。

日頃の思いに旅画師のこの言葉が響き、少年は一人で「ウエニス」への旅へ飛び出す。しかし、途上で山賊の追いはぎに遭い、先ほど確認した樵夫に助けられ、「無法の冒険」と批難されることになる。

第二に浪雄が旅画師と再会するのは、物語の末部である。樵夫の家出した一人息子が、実は浪雄が出会った旅画師だったのである。旅画師が樵夫の家に帰宅した際、浪雄は隣の部屋にいて、樵夫と旅画師の会話を耳にする。そこで明かされるのは、旅画師が、浪雄少年と同じ年頃のとくに「豪い者になる」志をもって家出をして「世界各国を廻り」、なおかつ家出をしてからは「居場所」を明かさなかつたものの、旅の先々から親に送金し「家出をしても、親孝行者」と言われていることである。そして今回の帰宅は一時的なものでしかなく、今後また修業のために「また／＼諸国遍歴に出かけ」るつもりだと旅画師は言う（二八四、一九一―二頁）。

奇遇な再会を果たした浪雄少年に、旅画師は次のように語りかける。

〔略〕君は僕と別れた後、此様な山の中へ迷つて来る様になつた

『立身膝栗毛』の構造

処を見ると、時日は短い其間にいろ／＼変つた境遇を経て来たのだらう、人間は變つた境遇を経る毎に、だん／＼偉くなるものぢや、随つて君もあの時よりは多少偉く成つたらう、アハ、、、』と、又た磊落に笑ひます。（略）真に愉快な人物です、私は此人を見ると、自分までが、前途に希望の光の輝いて居る様に思ふのです。（一九六―七頁）

浪雄が単独で「ウエニス」へ行こうとする旅を、「無法な冒険」を戒め、行動を「慎む」よう促す樵夫の「意見」とは対照的に、旅画師は、浪雄少年の経て来た境遇を「人間は變つた境遇を経る毎に、だん／＼偉くなるもの」として肯定する。その物言いを「愉快」と感じ、浪雄少年は「自分」の「前途」に「希望の光」を見出している。この結末は、作中の随所に示される浪雄少年の「飛び出したい」という願望と呼応している。

この旅画師による「旅」・「冒険」の肯定という結末は、同時代の読み手に対してどのような印象を与えるよう、機能したのだろうか。

ここで、今一度旅画師が持つ性質を確認しておこう。結末で明かされるように、彼は浪雄と同じくらいの年齢で家出をし、それからずっと「諸国遍歴」をして、身を立っている人物である。「磊落」、「愉快」と示されるその姿には、『西国立志編』や青年向けの立身訓や処世案内の書に散見される「困苦」「労苦」「勤勉」「忍耐」「義務」など、身を立て、成功するための「勤勉刻苦」や「禁欲主義」<sup>⑮</sup>とは異なる印象が付与されている。

旅画師は「感情に打ち勝て」という教訓すらも、自然のままに解決していくものだと達観した様子で捉えていることが描かれ、物語展開を通して、浪雄の父や樵夫の老人の言動と対比させることで、学校教育と「立身出世主義」の教訓のどちらからも逸脱した人物であることが読

み手に印象づけられる。

さらに、旅画師が肯定した浪雄少年の「旅」はどのようなものであったのかを次の場面から確認しておく。

「豪い者となる為には(略)危険を冒して外国へ旅立つた方が、有益にもなり面白くもあらう」(九五頁)と思い立った浪雄は、義兄弟の契りを結んだ薫少年に「ウエニス」への旅を提案する。「早く旅行がしたい」と思ふと(略)性質として一日も猶予が出来ない浪雄が、翌日急に、「今日ひそかに学校を脱出し、手に手を取合つて彼地に行かうでは無いか」と伝えたところ、薫少年は驚いて「僕は学校を休んで行く事は出来ません」と返答する(九七頁)。

浪雄は、薫が反対したことに怒って決闘状まで書くが、それに怯えた薫は「たゞ学校の規則が八釜しいから恐れただけです」と弁解する。すると、浪雄もそれを受け入れて「成程学校の規則を破り、無断でウエニスへ旅立たうとしたのは過失であつた」と、時期を延ばすことにするが、暑中休暇になつても、「様々の差支が出来て」行くことができない(九九頁)。

樵夫の「意見」が「家庭や学校」を飛び出して「無謀な冒険」をすることを注意していたのと同様に、ここでも「旅行」は「学校の規則」や日常生活に対置されている。

このように、浪雄少年の「旅」への願望は、繰り返し学校教育や家庭に対立するものとして示される。それはすなわち、中学校が象徴する立身出世を目指す青年の生活との対立でもあつたと推察できる。そのことは、旅画師との出会いによって「ウエニス」への旅を決意した浪雄が、「私は最う再び此学校へは帰らぬ積りですから、後をも振り返らず、都府はづれの方へと進みました」(二四四頁)と述べていることから確認できる。

『立身膝栗毛』の「旅」・「冒険」は、このように、「立身出世」を目指す青年の生活やその教訓からの脱出という意味づけがなされ、読者に呈示される。さまざまな教訓や「意見」を浴びる浪雄が、唯一「風のような者」と表現される旅画師の経歴と言葉に「希望の光」を見出すという結末は、この「旅」・「冒険」の位置づけを印象づけるべく機能している。

しかしながら、ここでもう一点留意しておかなければならないのは、以上のようにして「立身出世主義」と対立するものとして呈示される「旅」や「冒険」は、同時に、美人の誘惑により、彼女たちとの性的戯れを伴う「旅」でもあつたという点である。

「旅」・「冒険」に託された役割とは裏腹に、この作品の描写は、主人公の恋愛および性的体験に集中する。

### 三 恋愛と性に関する描写

第七回では、浪雄が家庭で「英雄や美人の事を書いた小説」ばかりを読み耽り、「其小説に同化され易きは少年の常」として、「英雄小説を読めば、英雄たらんとし、恋愛小説を読めば恋愛小説中の主人公たらんと(略)する有様」であることが紹介される。

その際、大人になつた語り手の浪雄から、「所謂小説を読むの利害は茲にある」として、「英雄たらんと欲せば(略)英雄小説を読み給へ」、「私は実験に照し、恋愛小説は多く少年を誤るものだと云ふ事を断言します」という読者へ向けた「意見」が挿入される(五九頁)。これは、『西国立志編』をはじめとして、明治三〇年代にも繰り返し返される議論を取り込んだものである<sup>16)</sup>。

語り手のこのような忠告が挿入されるにもかかわらず、『立身膝栗毛』は、主人公の恋愛や「情欲」を、執拗に書き連ねる。たとえば、本作に

描かれた主人公の恋愛遍歴は、次のように記される。

私は生まれて以来、婦人に対して情を動かしたのは今度で三度目、第一が雪子姫に対する愛情、第二がエンゲレン谷の神女に対する愛情、第三が聖女マリアに対する愛情、其中で雪子姫に対する愛情は、人間の初恋とでも云ふものでせう（一二四頁）

主人公が「旅」や「冒険」に出る際にも、話題のほとんどは、美人との恋愛や美人との戯れに集中する。

一一歳の頃、田舎の別荘に移された浪雄は、家庭教師から聞いた「エンゲレン」の谷の伝説に登場する絵連姫という「絶世の美人」の存在を信じ込み、「其様な美人の愛を受ける事が出来たなら、直ちに死んでも構いません」と思いつめ、家庭教師が止めるのを聞かず、その姫に会うために谷の巖窟探検に出かける。次に示すのは、浪雄が姫と出会い、歓待を受ける場面である。

貴方が妾を愛して下さるなら、妾も貴方を愛しますよ、妾は屹度貴方を満足させて上げます（略）と、今度は私の手を取って引起し、私の頬に暖かき接吻を施しました、オ、此接吻！（略）以前雪子姫の接吻を受けた時には、全身の慄ふやうに覚えました、今度は全身の血の沸立つやうに感じました。（略）『絵連姫（略）本当に私を愛して下さるのですか、其れなら私は生命を捨て、も構いません（七七頁）』

その後、「真暗」な「巖窟の奥」で、「姫から一方ならぬ厚遇を受け」と記される。

結局、絵連姫は浪雄の妄想が生み出した「幻夢」であったと説明づけられるのであるが、姫からの接吻を受けて「全身の血の沸立つやうに感じました」などの描写は、明らかに主人公の性的「情慾」を描いている。「ウエニス」への旅路においても主に筆が割かれているのは、「旅俳優」の美人二人の誘惑によって浪雄少年が彼女たちと「滑稽」で「可笑し」（二六一頁）な戯れをする様子である。

十八嬢は背後から私の頬に接吻し（略）一塊の氷砂糖を撮取り、ポカンと開けて居る私の口の中に押し込み、其上から温い掌で口を掩ひますと、二十嬢も負けじと（略）ヒシと私の首筋に抱ききました。

極楽へ行つたとて此様な面白い目に逢ふ事は出来ませぬ（略）全身は痺れる如く、殆ど夢中と相成りました。（略）二十嬢はすかさず私の上に乗るか、り、腋の下をくすぐるやら、鼻の頭に軽く噛付くやら。

十八嬢は（略）無理矢理に二十嬢を押し付けて私に獅噛み付き、私の顔中をペロ／＼舐め廻しました（一五八〜九頁）

美人二人との戯れに気を取られた浪雄は、寝ている間に魔酔薬をかけられ、金銭と衣服をはぎ取られてしまうという展開となる。

このように、『立身膝栗毛』には「旅」「冒険」の過程よりも、少年の恋愛描写・日常生活・精神状態に関する描写の方が圧倒的に多い。

それでは、「旅」「冒険」によって「立身出世主義」に組み込まれた境遇から逃れることに主人公が「希望の光」を見出すという結末と、作中で執拗に描かれる少年の情慾、性に関する描写とは、どのように関わっているのだろうか。

浪雄が制御できない感情には、怒りや悲しみといったものから、行動

に関する衝動や欲望、美人への恋情や情慾も含まれている。初恋の雪子姫との挿話では、雪子姫と踊る紳士に激しい嫉妬を向け、中学に上がったからは、美少年の薫を手に入れない衝動にかられる。そのほか、本稿でも触れてきたような、感情や衝動の起伏の激しさによって、様々な出来事が展開していくのである。

浪雄に意見や忠告を聞かせる父や家庭教師、樵夫は、浪雄少年が持つ感情の激しさや境遇に左右される精神や情欲を、健全な心身で勉学に励むためには抑制すべきものと捉えている。

たとえば、浪雄の父親は、浪雄が「演劇」に熱中し「狂気染み」(六一頁)たときには、「此頃大そう顔色が悪い様だ、病気だらうく、何んでも偉い者にならうと思つたら身体を大事にせねばならぬ」(六二頁)と述べて浪雄を「演劇」のない田舎の別荘に移して療養させ、また、浪雄が伝説の美女の話を実と信じ込み、妄想から美女の幻想との戯れを体験して体調を崩したときも、家庭教師の進言を受けた父は、浪雄を自宅に連れ戻す。

『西国立志編』では、「少年」の刻苦勉勵が、常に食欲や色欲を含めた情欲を抑えることと裏表一体の関係にあることが示される。

少年ノ人、速ニ願欲ノ心ヲ事業ノ上に注ガザレバ、肉慾ニ煥ニナ  
リテ、顔容瘦白ノ病ヲ生ズベシ(「三人夙に事業ニ志ヲ立ツベシ」、前  
掲二五六頁)

したがって、「少年」の情欲を誘惑するものとして「稗官小説」を避ける必要が説かれる。<sup>18)</sup>

明治二〇年代から三〇年代にかけての学生風紀問題に関する言説の分析を試みた渋谷知美<sup>19)</sup>は、学生の風紀が性にまつわる事項に集中して問題

化される際のレトリックについて、「これらの行為がなぜ問題か」という理由が記事中で説明されることがないという特徴を指摘しているが、『西国立志編』に顕著な自助の論理を考慮すれば、明治三〇年代の学生の性的腐敗墮落を咎める言説には、この刻苦勉勵と裏表一体となった情欲排斥の論理が前提になっていたのではないだろうか。

このように、将来の成功のために青年に刻苦勉勵を求める「立身出世主義」の論理と「恋愛文学」や性描写は相容れない関係にある。

「立身」を冠する小説に、恋愛と性を執拗に描くことは、「立身出世主義」に組み込まれる青年に禁欲を要請する言説に対しての抗いであり、家庭や学校教育など、世間での青年に求められる美徳への皮肉として機能していたのではないだろうか。

#### おわりに

以上、『立身膝栗毛』の本文分析を通じて、この作品が同時代の青年の境遇を物語化した内容をもつことを確認してきた。その際、「旅」・「冒険」には、「立身出世」を目指す青年の生活やその教訓からの逸脱という意味づけがなされ、恋愛描写には、青年に求められる美徳への皮肉としての機能が付与されていた可能性を示した。

『立身膝栗毛』にみられる「旅」・「冒険」への志向と、恋愛・性描写の執拗さとは、このように、「立身出世主義」の教義と教育制度に組み込まれていく青年の境遇への違和感をめぐって、『立身膝栗毛』の要素となつたと考えられる。

特に、押川春浪が小説における「旅」・「冒険」に、「青年を取り巻く境遇や教訓から抜け出す体験」としての意味を与えていたことは、押川春浪作品における「冒険」が「国家を担う体験」としてだけでなく、重

層的な意味を持つ小説表現であったことを示しているのではないだろうか。青年の境遇への違和感を小説として表現した『立身膝栗毛』は、押川春浪の作家活動の多面性を示していると考えられる。

## 注

- ① 高橋修『明治の翻訳ディスクール——坪内逍遙・森田思軒・若松賤子』（ひつじ書房、平成二七年二月）三〇六～三二二頁。
- ② 大正五年、江戸川乱歩が二二歳のときに自製。中相作「奇譚」百年出発と回帰（江戸川乱歩『奇譚』（中相作翻刻・校訂、藍峯舎、平成二八年二月）所収）参照。『立身膝栗毛』については、同書のうち「BOO K I」の「Chapter1 押川春浪」に記載されている（翻刻・校訂版、四頁）。
- ③ 以下、引用文中の傍線はすべて筆者によるものである。
- ④ 前田愛「明治立身出世主義の系譜」（『近代読者の成立』有精堂、昭和四八年、岩波現代文庫版、平成一三年二月）参照。
- ⑤ 竹内洋『立身出世主義「増補版」——近代日本のロマンと欲望』（世界思想社、平成一七年三月）、雨田英一「近代日本の青年と「成功」・学歴——雑誌『成功』の「記者と読者」欄の世界——」（学習院大学文学部「研究年報」第三五輯、平成元年三月）参照。
- ⑥ 竹内洋、前掲、一二七～一三一頁。同書によれば、明治三〇年には男児の就学率は八一%となっている。また、高等小学校卒業生で、中等学校に進学しない者の急激な増加を指摘している。
- ⑦ 藤井佛川「自然主義」（『新声』一〇編五号、新声社、明治三六年一月）。
- ⑧ 「万朝報」明治五月一日～二日、二七二九～二七三〇号、三頁。
- ⑨ 竹内洋、前掲書。
- ⑩ 明治四年に中村正直がサミュエル・スマイルズの『自助論』（セルフ・ヘルプ）を訳して刊行した『西国立志編』は、明治二七年に博文館から再刊されている。八編「剛毅ヲ論ズ」の「四 一時一事」には次のようにある。

世界ハ大学校ナリ、困苦ハ良師友ナリ（略）実にコノ言ノ如ク、少許ノ困苦耐ヘズシテ、ソノ志セシトコロノ事ヲ猶予スルモノハ、即チ良師友ヲ厭棄シテ好テ失敗ヲ取ルノ道ナリ、故ニ何等ノ課業ヲ論ゼズ、始ハ避逃ルベカラザルモノト思ヒテ務メテコレヲ為スベキ（略）人ヨク自ラ全副ノ精神ヲ以テ、一時一事ヲ勉メ為サバ、ソノ人、才性至鈍ナリトモ、一生ノ間ニ、許多ノ事ヲ成シ得ベシ（二五七頁。引用は、中村正直『西国立志編』（博文館版、明治二七年七月）より。）

- ⑪ 「伯爵夫人は、高等の教育を受けた人ですから（略）何事にも厳格で、少しの過失をも見逃さぬ性質でしたから」（八頁）。
- ⑫ 「桑木先生と申し、ウキンナ大学を卒業した人です」（五七頁）。
- ⑬ たとえば、「五 克己」の項目に、「ニューヨーク州の知事となり、次に代議員議員となり、それから遂にリンコン大統領の下に北米合衆国の國務卿となった」人物が、大学生の時代に「克己の徳」に欠けていたため、大学生活に必要な資金を一年で使い切ってしまったが、父から「お前がその席に任を負ふべし」と言われたのをきっかけに、以降は「すべての情慾を抑制して（略）一心に勉強した」、それにより今の地位を得たという成功譚が掲載されている。二〇～三頁。
- ⑭ 中村正直『西国立志編』（博文館版、明治二七年七月）、菅緑陰『成功要録』（博文館、明治三二年二月）の「序訳文」などを参照。
- ⑮ 前田愛、前掲一二九頁。
- ⑯ 「恋愛文学の害毒」（『万朝報』、明治三四年七月七日）など。
- ⑰ 浪雄が梅村薫少年と義兄弟の契りを結ぼうとする件りに、「勿論私が彼に交際を求めるのは、彼を有益な友と思つた為ではなく、いと恐るべき情慾の燃えた為でありました」とある（九二～三頁）。
- ⑱ 「第十一編 自ら修むるの事を論ず並に難易を論ず」の「二十四 稗官小説の害」、中村正直訳『西国立志編』（博文館、明治二七年七月）を参照。
- ⑲ 『立身出世と下半身 男子学生の性的身体管理の歴史』（洛北出版、平成二五年三月）、第二章、二八一頁。

（本学大学院博士後期課程）